

せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館842-2590
第119号・平成11年8月1日

年表で読む

古平の歴史

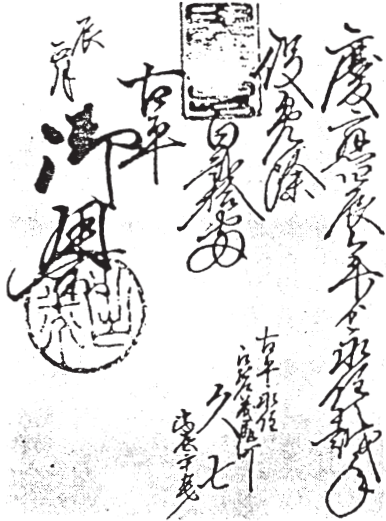
《27》

■古平御用所

時代は大きく変わって年号も《明治》となりましたが、蝦夷地を治める役所となると、幕府の時代から続いていた箱館奉行所でした。そこで明治新政府は明治元年四月、この奉行所を廃止して、蝦夷地に最初の役所として箱館裁判所を設置しましたが、すぐに名前が箱館府と代わりました。

しかし、国内ではまだ幕府軍との戦いが続いていて、蝦夷地では箱館の五稜郭を中心に幕府側の榎本武揚と官軍とが、その年の十一月から翌二年の五月まで戦っていました。これが戊辰戦争です。

明治元年正月、幕府の箱館奉



行所であったとき、古平郡には古平御用所が置かれていて、江差から古平に移住して来た幾井久七に、次のような『永住越年役免除』の書き付けが渡されています。

■古平御役所

明治維新の動乱がようやくおさまったものの、まだ各地で事

件がひんぱんに起きて国内はあわただしい時期でした。

その中で明治二年七月、開拓使が設置されると箱館府は廃止され、八月にはそれまでの蝦夷地が『北海道』と改称されました。

開拓使は、一応千島・樺太なども管轄下に置いていましたが、実際は政府の省・藩・有力者（華族や士族）・寺院などによって土地が分けられ、それらによって支配されていました。

北海道に開拓使が置かれたといってもその役所は東京にあって、長官の身分はほかの省の長と同格でしたが、役所は間借り

の仮住まいでした。

出張所として役所を箱館に移し、このときから現在の地名である函館と改称しました。

それから間もない十月、開拓使本庁を札幌に建設することになり、そのため銭函に開拓

使仮役所が置かれることになり、古平郡に古平開拓出張所が置かれました。

この間制度もたびたび変わり、明治二年七月二十七日付けで幾井久七に与えた通行手形には、古平御役所となっています。

古平御役所
明治二年七月二十七日
幾井久七



フルヒラ御役所
巳七月二十七日

※戊辰(ぼしん)というのは、明治元年の干支(かんし)が戊(つち)と辰(た)で、昔は年や月日を表すのに使われました。野球場としてよく知られている甲子園は、甲(き)子(こ)の年(甲子)大正十三年に建設されたことから名付けられたものです。ちなみに今年の干支は己卯(み)です。

大正五年

12/12 刺網の客がポツポツ

来る、値段は高くなっているが、昨年に負けぬ売り上げがあるだろう。なぎが続き、カレ網はこの分だと年末までに三百〜四百円は獲るだろう。大謀で小鯨が揚がる、食べた

12/15 夕方、カレ網漁がど

うかと本陣の浜に見に行く、どこも大漁だ。カレ二百貫、ほかにカスベ、サメなどで二十〜三十円の漁がある。サメのために網の切れること実にひどい。

12/18 正でむこ入りがあ

るといので父が招待されて行く、ずいぶん盛大にやるとのことだ。

12/19 快晴だが寒い、寒暖

計は三十二度F(〇度)にまで下がった。天気が良く、なぎも良いのでカレ網は一斉に出漁、大漁で百貫以上獲った船もある。カレとカジカを貰って帰る。

12/21 寒い寒い、硯に入れ

た水も氷っている。十時から学校で、函館連隊区司令官安原中佐の講演会があり聞きに行く。欧州戦争の原因から目下の状況、ドイツの講和申し入れの理由から日本国民の覚悟まで、一時間半にわたって話をされた。ドイツは実に強い国である。

12/23 ドイツの講和問題で

株、雑穀などが大暴落する、

高野名幸作さんの日記から



[20]

市場では成金か倒産かのどちらかに分かれたという。

12/24 カレ網大漁、二百貫

(七五〇き)も獲った船があるという。家ではすす払いをやる。夜、初売りのピラ二〇枚を書く。

12/27 大吹雪、大荒れとな

る。沢江の川畑の家から小川までは波があつてひどいとのこと。十時ころ長野さんの家へ波が上り大騒ぎ、ちようち

んを持って行つたが吹き飛ばされそう、荷物を水産組合へ運ぶ。本陣の浜でも大騒ぎ、なんとひどい荒れた。

12/28 昨日からの大吹雪、

今日になりいつそう猛烈となる。浜に行つて見るとこの廊下も矢来も取られた、山田才太郎さんから向こうはいっそうひどい、川畑さんのところなどは浜になった、沢江の橋もさらわれてしまった、よ

うやく波待ちをして沢江へ行く。川畑さんの家はつぶされてしまい、命、△、又の廊下は半分は壊れている。そのほか危険なところはたくさんある。

カ、共同では新築したばかりの廊下一棟がつぶれた、西村さんの矢来も取られ、浜一帯はなにしろ大騒ぎだ。沢江、山中、沖村回りもひどいとのこと、群来村の困漁場でも石

垣、廊下を取られたという、ちようど津波の来たようだと大騒ぎだ。夜になって風が強くなり、家がミシミシ鳴り、通行も出来ぬほどの風だ。浜では昨日以上の荒れで大騒ぎしている。

12/29 一日以来の大暴風、

大時化は今日も止まない、昨晩の風雪でまたまた大被害が出た。越中屋から、板倉が流されるといふ電話があり熊さんが行く。種金では廊下二棟船五隻が壊されたという。入船町まで行つてみたがこども大騒ぎ、八でも廊下が流されるといふので、人夫が大勢で作業をしている。帰り道、猛吹雪で顔も向けられないほどだ。困のおつかさんが、沖村から山越えて来るというので迎えが行き、四時ころ無事着いたが道中が大変だったという。夜になつても吹雪は少しもおさまらない。困では群来村のほか、積丹でも漁場が被害を受けて、三千円以上の損害だという。津波のごとし。

—— 続く ——

▼北洋へ出漁するカニ船団

当時、丸山町にあった山田漁業部は、古平町の大火後、私たちが丸山町へ移ってからの知り合いです。家も隣同士で、子どもたちも中学校へいっしょに通っていたこともあって、親しくお付き合いをしていました。

山田さんのところでは以前から漁業を営んでいて、昭和四十一年ころからはすけそ漁を切り上げると、カニ船団としてベーリング海へ出漁していました。

ちようど家が隣でもあり、親しくしていた関係で、私の長男も「乗組員にぜひ——」ということで、その年お世話になりました。漁模様もよく、みなさん元気で帰って来ました。

翌年、また乗ってほしいという話がありましたが、本人があまり気が進まないというし、ほかで仕事もしていたので、せつかくのお話でしたがお断りしま

北洋に消えた十五人の
ご冥福をお祈りして

第十一北光丸の遭難

竹内コト

した。

その年の二月、北光丸はほかの船といっしょに、盛大な見送りを受けて古平港を出港して行きました。雪も止んで、冬のこの時期としては穏やかな日でした。

みんなが航海の無事を祈り、太漁を願って華やかに見送りをしたのに、なんとこのとこ、それからわずか十日ほど経った三月四日、カムチャッカ半島東海上で船体着氷により遭難したということです。あの北光丸が沈没したなどと、とても信じられませんでした。

誰もがその悲報を聞いて、まだ無事であることを祈りながら、大きな悲嘆にくれました。船主でもある山田さんでは、兄弟二人を一度に亡くしてしまったのです。慰める言葉もありませんでしたし、ましてつき合いの深

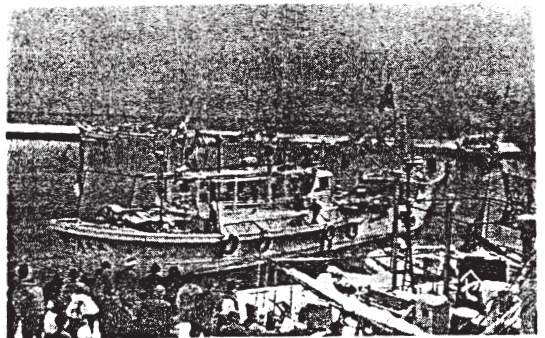
かった隣の不幸でしたから、なおさらのことやりきれない思いでした。

漁労長として乗り込んでいた準一さんの弟の栄治さんは、私のところの次男と同級生で、乗組員の石田一憲さんは長男と同級生でしたし、血氣盛んな若者たちでした。

乗組員は十五人でしたが、全員が行方不明ということでした。三月の北の海の危険なことはわかりますが、その恐ろしさを改めて知らされた思いです。遭難の悲しみもまだ消えない三月十五日、禪源寺において北光丸乗組員の合同慰霊祭が、五百人からの参拝の方々が見守る中、しめやかに行われました。その後、私はそのころ保険の

仕事をしていましたので、そのことで少しでもお役に立とうと思い、まず漁協へ行きましたがどうもはつきりしないので、思い切って小樽の海上保安本部へ行きました。

——この稿続く——



古平港を出港する第十一北光丸



断章小説 【ふるさと遙か】

少年の航跡

I

吉川 義雄

陽光は眩しかったが、四月の風は、船の上では冷たかった。

航跡遙か、白く細くてゆくその先に、彼の故郷の山々が、見たこともない形に変貌し、果ては山頂に白雪を輝かせている。積丹半島だけが、煙霧に浮かんで見えるころ、少年の彼を乗せた定期船は、隣り町の棧橋に着いた。

「ハラ減らねが……」

腹がすくわけはないのに、彼の祖母は心配そうに声をかけた。彼が札幌の書店に奉公すると決まっただけは、オウが連れて行くこと、誰が何と言おうとがんとして譲らなかつたのだ。

彼が小学校を終えるころ、世の中は妙な雲行きになつてゐた。相沢中佐事件、五・一五事件、そしてついに二・二六事

件が勃発（はげ）した。担任の教師は、困り果てた顔を隠さずに「今、先生は説明できないが、君たちが大人になったら判ると思う……」

と、一切評価しなかつた。

日本は病んでゐた。戦後、解体されるまでは、一握りの軍閥、財閥、門閥といった連中が、それぞれ悪の集合体をつくり、国民の幸せを好きなように踏みしめてゐた。

国民の方も、幸せとは金を持つこととか、肩書きのいかめしい偉い人になることと信じて止まなかつた。人の不幸を踏み台にしても……

小学校の卒業時、彼の学業成績は上位にいたようので、担任の教師が彼の家に来て、「上の学校にやれねえか……。」と、

彼の父に相談をもちかけた。

「俺らたちの子を心配してくださるのはありがたい話だとも、しよせんはゲル（かえる）の子はゲルだべさ。」

と、あっさり一蹴した。

かたわらでその話を聞いていた彼にしても、別に残念とも、くやしいとも思ひもしなかつたし、大体、俺は勉強なんか好きではないと、当人が納得してゐた。

しかし、担任が二度目に持つて来た書店奉公の話の時には、彼の目は輝いてゐた。

「少年倶楽部が読める……」

勉強は嫌いでも本だけは読みたい彼は、月刊の『少年倶楽部』という雑誌は宝物みたいなもので、自分で手に入れるために、何日も鯀倉の中で数の子抜きのアルバイトをしたし、昆布巻き延ばしの出面取りに励んでいたのだ。五十銭ためるのに鯀倉の腐臭も、逆むけの指の血も平気だったのだ。

彼の札幌行きは、父親も意外にあつさり認めた。日ごろから何をやらせても漁師向きではな

く、「ゲルの子」でなくなつてゆく息子をあきらめたいらしい。それでも彼の卒業前、その書店から採用試験の通知が来たとき、さも自分が受験するような張り切り方で、彼を連れて札幌に出た。

そして、自分の息子がさも世にも珍しい出来た子で、採用しなければそっちが損をする、口頭試問をしている人たちにワメキちらした。

二度目の札幌行きは、父と祖母の戦いだったが、祖母が勝つた。札幌までの恩愛のドラマも、その航跡を新緑の街が消した。

札幌はオットリした街であつた。街路樹が多く、その緑の下をチンチンと、誰も驚くことのない警戒音を鳴らして電車が通つてゐた。

海が見られなくなつた彼のわびしさは、すぐ癒（な）された。

本は読みたいだけ読めたいし、どんな仕事でも漁師の家の仕事からみれば、どうということはない。それに、この街から多くの ※（次ページへ続く）

消えゆく想い出も新たに

渡辺 ハツエ

古平の象徴ともいわれる、丸山のふもとで過ごした六十余年は、私にとってはまさに安住の地での歳月でした。

かえりみると、元鯉場の大綱元の土地に亡父が仕事の関係で引越したのは、私がまだ小学校の低学年のころでした。当時は付近に家も少なく、ひっそりとした静かなところでした。

ちょうど昭和の初期でしたが、不漁が続き、将来も思わしくない鯉漁の打開策として、助宗漁業に進出する人たちが増えてきたころです。私の亡父もその一人でした。また、鯉の延縄漁も同時に営んでおりました。十一月に入ると助宗漁を始め、正月が明けて二月になると鯉釣漁に切り替えての操業でした。厳冬の海の操業には、今以上の大変な苦労があったことと思われまふ。それでも、和船で櫓(こ)を漕いでいた時代に、小さ

いながらも発動機船に乗っていましたが、漁師人生での少しは誇りもあつたと思われます。

同業者に、亡父と同年代の中村さんがあり、住まいも隣同士でした。互いに漁では張り合いながらも、協力し合つて励んでいました。ある年、中村さんの息子さんがお嫁さんを迎えるこ

とになりましたが、それがなんと私と同級生の佐藤ユキさんでした。「ユツコちゃん」と呼んでいましたが、ユキさんはおとなしい、かわいい人でした。二年生のときに学芸会に選ばれて、『テンテン手まり』の踊りを見せてくれましたが、とつてもかわいくて、上手に踊っていたのが印象的でした。急に懐かしく思い出されました。

そんなことがあつてから長い歳月が経ち、喜寿を迎える年齢になりました。ユキさんとは*

※ 女性が通つて来ていて、その美しさと優しさに、彼は感動した。次々と、思春期の彼は恋をした。故郷は次第に彼から遠のいていった。

* それからも縁があるのか、それ以来ずうつとおつき合いが続き、現在も隣同士、いろいろとお世話になっております。むかしのことを、ついこの間のこのように思い出しております。

古平の名勝地

霊場

観音滝のあたり

1

▽名勝地観音滝

古平に住んでいても「観音滝」を知らない人が随分といふようです。古平町の上水道の水源にもなっている泥の木川の上流にあり、周囲を山に囲まれて、四季の自然の美しさは以前から町の人々に愛好されてきました。

大正の末ごろ、禅源寺住職であつた岳転和尚が、滝のある景色と下流の水田をうるおす清流を見て、この滝を中心に、ここに観音像をまつり「霊場」を建設することを思い立ちました。これについては、当時、禅源寺を集会の場としていた修養団体と協議し、建設に向けて、広

く町民に呼びかけて寄進を求めました。
また「西国三十三所」にならつて、個人や団体による三十三体の観音像を設置し、名称も「観音滝霊場」としたのです。――以下次号――
秋田岳転和尚歌碑(観音滝)



遙かなる故郷の思い出

[57]

わが闘病生活 ⑦

橘 義 春

八月七日(水)

今日も何か体調が良くない。くろだ医院へ行き、先生に、昨日は二回も失神した話をしたらびっくりしたようだった。

早速、血圧と脈拍の検査をしたが、心電図検査の結果、心電図にも異常が現れていて大分ひどいという。応急処置として、首の頸動脈を押してみたが不整脈はおさまらない。注射に切り替えてどうやらおさまったようだ。

「紹介状を書きますので、日赤武蔵野病院へ行って検査を受けてください。」

と言って、私の現在の病状と先生の所見を書いてくださった。「これはいよいよ大変なことになるナ」

と、覚悟を決めた。

八月八日(木)

日赤病院に行く。近いところにあるので便利だ。今日は、途中で私が失神発作を起こしたら大変と家内が付き添って来る。

病院の受付で、くろだ先生からの紹介状を出す。相変わらず外来患者のコーナーは混み合っている。待つこと二時間ほどで私の番が来た。若い先生で、

「心電図検査の結果、心房細動があります。検査するので入院した方がよい。その結果によってはペースメーカーの埋め込みをするようなことになるかも知れない」と、先生からアドバイスがあった。

八月十日(土)

「二十四時間心電図を取り付けますので来てください」と言われ、病室の空き次第入院の手続きをして帰った。

八月十二日(月)

二十四時間心電図を取り付けるため、日赤病院に行く。

八月十三日(火)

午後、二十四時間心電図を日赤へ返しに行く。この日、心電図を外す前にフーと気が遠くなり立ちくらみが起きる。

八月十四日(水)

今日も体調が良くない。家内が午前、老人会のフォークダンスに出かける。私は一人で留守番、テレビの前のパイプイスに陣取って画面を見ていたら、急に体がグラグラしたようだ。

「地震かな」

と思ったとたんに、いすから頭を下にして畳の上に落ちた。パイプイスにはひじ掛けがないのでつかまるところがなく、大分起きようとしてもがいたがどうにもならなかった。アリ地獄にはまったようなあんばいだ。

なんで私が起き上がれないのだろうと考えてみたが、どこも痛いところはないが、左手が思うように動かない。そのうち左足も変だぞ、と気がついた。右手が大丈夫のようなので、右手を畳について起き上がったら上

半身だけ浮いたので、

「よし、隣の部屋のベットまで行こう」

と思い、昔、軍隊で覚えたほふく前進を思い出して、右手でそろりそろりとベットに近づき、右手でやつの思いではい上がつた。

「何かあったんだらうか」

頭がボーとしてよくわからない。仕方がないので、家内が帰って来るまでベットの上で待つことにした。

十二時過ぎに家内が帰って来たが、私がベットに寝ているので変だな、と思ったらしく、「どこか具合でもわるいの?」と、言葉をかけてきたが、私の方は頭がモヤモヤとして、なにを言っているかわからない。

家内は、私の様子が普段とは違うと感じたらしい。私のしゃべる言葉も少しろれつがまわらないし、口も顔面神経痛の人のようだと思いがついたが、まさか命にかかわるような重大な事態になつていようとは、知るよしもなかったのである。

—— つづく ——

古い統計などを見ている 抜き出したものです。時代が違
と、現在とくらべていろいろ いますが、当時の警察は広い範
おもしろいことがあります。 囲の業務にたずさわり、また、
これは大正15年の古平警 多くのことについての調査もし
察署に関する統計の一部から ていたことがわかります。

古平警察署関係の統計から (大正14年)

▲古平警察署 電話架設 明治44年11月10日 [844番]

署員 13人 (警部1人) 土工・漁夫取締り2人

▲熊 捕 獲 6頭

▲交通事故による死者 (全 道)

大正6年	2人	大正10年	2人	大正14年	5人
同 7年	1人	同 11年	1人	———	
同 8年	3人	同 12年	2人	同 15年	3人
同 9年	2人	同 13年	2人	昭和2年	9人

▲消 防

自動車ポンプ 1台 ガソリン〃 2台 手押し〃 12台

▲医 療 医師・看護婦 12人 産婆 9人

▲主 な 営 業

料理店	27軒	飲食店	14軒	理髪店	24軒
女髪結い	7軒	かじ屋	14軒	旅館	19軒

▲遺 失 物

金の紛失	91件	378円55銭5厘
拾 得	71件	191円37銭
時 計	紛失 10個	拾得6個

▲制 止・盗 難 など

街頭で小便	3,029件	けんか・口論	30件
酔っぱらい	150件	盗難・詐欺・すり	73件

▲火 事 5件 (損害額239円)

▲交 通

荷馬車	99台	荷車	154台	乗合馬車	4台
乗合馬そり	7台	自転車	23台	貸自転車	4台

▲娯 楽 演芸の行われた日数 35日

活動写真 (映画) 120日 浪花節 24日

観客数 (延) 大人 22,895人 小人 18,250人
人口100人に対して231人 (1年間に1人2.3回)

(大正15年・北海道庁統計書から)

柳 川

夕 焼 け に 幼 顔 に な る 老 い の 顔
孫 の 顔 祖 母 に よ く 似 て 血 の 流 れ
満 た さ れ る ふ る り の 温 泉 暖 か い

石 井 愛 子

あ と が き

★先月号はすっかり遅れてご迷惑をおかけしました。できるだけ一日には発行いたします。
★「第十一北光丸」の記事の写真は、高見久夫さんをお持ちの古

平漁協『浜だより』から転載しました。ありがとうございます。
★「観音滝ものがたり」一冊にまとめて発刊の予定ですが、内容を少し変えて、先にご紹介をいたします。

俳句

吉平ホトトギス会

梵妻の涼しき声にむかえられ 斉藤波留
 おみこしの若者茶髪ネックレス 山口悦子
 ミニトマトたわゝに熟れて摘みにけり 越野敏雄
 心配のつきぬ人生銀河濃し 大和田絵伊
 ウォーキング振り向かざるゝ閑古鳥 福井幸平

短歌

吉平岬短歌会七月詠草

草むらに転がるボール風化せり遠き日子らの投げしものらし 竹内コト
 入院し束の間の友の訃報受けこみ上げる涙はとどむを知らず 榊佳代
 みどり木々に海風わたる家を恋ふ遠き子の許に膝癒やしめて 池田テル
 披露宴の瞳の数の祝福に笑顔こぼるる花嫁優子 堀典子
 待ち侘びし雨降り通る夕方に裏山に大きな虹立つ 丹後初江

羊蹄山のふもとを包む芋のはな 仲谷美砂
 散策の道川沿ひの下萌ゆる 大島喜恵
 風鈴のささやく風を離しけり 関口勝志
 亡き夫の好みの浴衣面映ゆく よしざきり
 三世代継ぎ来し祭り大提灯 山口浪
 昼顔の今日の命を咲きにけり 仲谷比呂子
 春光や天守一氣に上りつめ 越野清治

田中香苗

東美知

鈴木時子

山口スエ

奥山きよみ

長崎フユ

夏祭り終りし夜の静けさに提灯の灯の只柔かく
 蛙聞くこともなくなり山裾の牧草細緑を敷きぬ
 切り捨てし桜の枝々葉の元に浅黄の萌芽あまた吹きをり
 裏方に徹して四十五年おまつりの渡御行列今に見ざりき
 音もなく降る雨にぬれ街角の咲き盛るラベンダーの紫冴ゆる
 何おどる学芸会の一年生赤いあんよがすべつてうらがえし